

之八について

田 口 聖 一

○問題其の一

一、周易であるか否か

二、貞悔

(1) 非周易説

(1) 本卦・之卦説

(2) 周易説

(2) 兩卦説

(3) 批判

(3) 批判

○問題其の二

一、爻の立場

二、卦の立場

左傳襄九年に「遇艮之八」の句が出て居り、晉後には「得貞屯悔豫皆八」と「得泰之八」の二句が出てゐる。この三句は何を指すのであるかといふことについては、從來先儒の間にいろ／＼な説がある。この中に私の最も妥當なりと信じる説を海保漁村の周易古占法の中に見出すのであるが、この小論をば次の二問題に答へつゝ進めて行き度いと思ふ。

(其の一) 此の三句の解釋に於て、異説の生じた原因、或はその解釋を得るに困難ならしめた原因は何處にあるか。そしてその原因を如何に處置すべきか。

(其の二) 從來の諸説は如何なる過程を示してゐるか。

右の二問題である。

○問題其の一

右の三句、即ち八を含む一群の術語を正確に解釋することに對して障害をなすものは、次の二點であると思ふ。一は

この術語は一體周易上に用ひられたものであるか否かといふことの疑問であり、二は筮の語貞屯悔豫皆八の貞悔とは一體いかなる意味で用ひられたのであるかが判然しないといふことである。

一、周易であるか否か

この術語が周易であるか、それとも周易と範疇を異にする他の易の術語であるかによつて、この術語が、春秋内外傳の占法に於ける地位が明瞭にされる。蓋し、若しこの術語が周易ではなく、他の易の術語であるとするならば、この術語に對する解釋を殆んど斷念せねばならぬであらう。何故ならば現今に残存してゐるのは周易一箇であるからである。而してこの問題に對して二説がある。周易でないといふ説と周易であるといふ説である。

(1) 非周易説

この説を主張するは次の三つの理由による。

(i) 周易は九六を以て占するが、夏殷は七八を以て占する。八とある故にこの術語は周易ではなく、夏殷によつたのであるといふのである。

周禮大卜の疏に賈公彥が引用した文にこれが見えてゐる。曰く、

爻在_二初六九三六四六五上九、惟六_二不變。連山歸藏之占以_二不變者爲_レ正、但周易占_二九六_一、而云_レ遇_二艮之_二八_一、是據_二夏殷不_レ變爲_レ占之事。と。

これは誰の言かは賈公彥が言はないので判らない。或は服虔でもあらうといふ説も勿論その眞偽の程は判らない。がとにかく賈公彥以前、即ち唐以前の人の説であることは間違ひがないことである。

杜豫も

周禮大卜掌_二三易_一、然則雜用連山歸藏周易、二易皆以_二七八爲_レ占、故言_レ遇_二艮之_二八_一と註してゐる。

(四)右の説の根據として孔穎達の擧げたもので、それは「遇_レ艮之_レ八」の下に穆姜が「是於_二周易_一」といひ、「貞屯悔豫皆_レ八」の下に、司空季子が「是在_二周易_一」というてゐるからである。「遇_レ艮之_レ八」及び「得_レ貞屯悔豫皆_レ八」の下に「夫々特別に「是於_二周易_一」「是在_二周易_一」といつてゐるから、前の二句は周易ならぬ他の易でなければならぬといふのである。曰く、

先儒爲_二此意_一者、此言_レ遇_レ艮之_レ八、下文穆姜云、是於_二周易_一、晉語公子重耳筮得_レ貞屯悔豫皆_レ八、其下司空季子云、是在_二周易_一並於_レ艮八之下、別言_二周易_一、知此遇_レ八非_二周易_一也（左傳襄九年疏）と。

(五)右引用文中の、「艮八之下別言_二周易_一」とあることによつて「艮之_レ八」は周易でないとする。即ち「艮之_レ八」の下に史が、これは「艮之_レ隨」を謂ふのであると説明してあることによる。「艮之_レ隨」は周易であるから、前の「艮之_レ八」は周易でないといふのである。竹添氏も會箋に於いて、

此傳及晉語於_レ遇_レ之_レ八別言_二周易_一、知_二此遇_レ八非_二周易_一也。

といつて、周易でない證據としてこれをあげてゐるのである。

(2)周易說

宋、清の學者は大抵周易であるといふ見方を取つてゐる。周易であるといふ根據は前の周易でないといふ主張に對して斷片的に反對してゐる中に見られる。

(イ)「艮之_レ八」の下にある史の言葉「艮之_レ隨」に對する占詞はこれは史が穆姜をかりに悦ばす爲に引いたもので、「艮之_レ隨」と同じく「艮之_レ八」も周易であるといふのである。劉禹錫の語としてよく引かれるのに次のものが見える。

史以_レ遇_レ此爲_レ不利、故從_二變爻_一而占曰、是謂_二艮之_レ隨、苟以悅_二於姜_一耳、而杜元凱以爲_レ櫟用_二三易_一、故有_二遇_レ八云_一非也、（左傳杜解補正引用所載）

(ロ)左傳に於ける他の占例より考へてこれを周易となすものがある。錢大昕曰く、

若雜以它占則否、千乘三去、射其元王、不云蠱之八、復之八者、非周易繇詞也、(潛研堂文集)

と。成十六年晉侯筮して「遇復」と出て、「南國賦射其元王、中厥目」といひ、僖十五年「遇蠱」の所に、「千乘三去、三去之餘、獲其雄狐」と出てゐる。此の「南國云云」と「千乘三去云云」との二句は繇辭らしいものであるが、現今の周易には見えない。故に之を二代の易の繇辭であるとするのである。所が錢大昕の立場として、この「遇蠱」「遇復」も、又「艮之八」も同じく象辭を以て占するをいふのであるとする。而して「遇蠱之八」「復之八」といつてゐないのは「南國云云」「千乘三去云云」の二句が周易の繇詞でないからであるとする。即ち「遇蠱」「遇復」が周易でないとするならば、「艮之八」といふのは周易であると考へるのである。

(3) 批判

(1)の(イ)に對しては孔穎達が既にその根據のないことを言うてゐる。曰く、

其連山歸藏以不變爲占。占七八之爻。二易並亡。不知實然以否。世有歸藏易者。僞妄之書。非殷易也。假令二易俱占七八。亦不知此筮爲用連山。爲用歸藏。所云遇艮之八。不知意何所道。以爲先代之易。其言亦無所據。賈鄭先儒相傳云耳。(正義)

と。即ち連山歸藏二易が七八の爻を占すといふけれども、今二易が亡んでないからそれが眞であるかどうかは判らないといひ、更に「艮之八」を先代の易であるとするのも何等の根據もないといふのである。唯この二代の易であるといふ説に主張性を有たせようとするならば、賈鄭先儒相傳といふ點にあるといふのである。

一體、この説をなすものは周禮大卜の次の文に本づいてゐる。

掌三易之辨。一曰連山。二曰歸藏。三曰周易。其經卦皆八。其別皆六十有四。

右の連山・歸藏は夏殷の易であるといふのであるが、之は頗る怪しい。本田博士がその著支那經學史論に於て、易の成立を論じて、連山・歸藏は周易より後に出來たるものとしてゐるが、従ふべきであらう。同書百十四頁に、

周禮の連山歸藏二易は予は周易より後に出來たもので春秋に於ける公穀二傳の如き者と思ふ。

と述べられてゐる。之は周易の成立を次の如く考へるから來る結論である。曰く、

易の成立する以前に卜法やら筮法（洪範の貞悔等）があつて、其れに用ひられた頤即ち繇辭の如きは無數にあつたに違ひない。其れは左傳などに見受ける周易以外の者で押韻して一見易の文の如く見えるのが多々あるのでも分かる。其等の者から選擇して一編の纏まつた者としたのが今の周易でなからうか。

と言ふのである。即ち周易以前に他の易は存在しなかつたと見るのが正しいと思ふ。それは私の見る所によれば周禮の「其經卦皆八、其別皆六十有四」とあつて、三易とも八卦六十四卦を持つてゐたとあるによつても窺はれはしまいか。若し二易があるとしても、これによればその構造が同一のことになる。鄭注には其名と占とが異なるのであるとしてゐるが、賈公彥が占が異なるといふのは連山歸藏が七八を占し、周易が九六を占するをいふのであるとしてゐる。然し、七八を占するといふのは孔穎達の云へるが如く、その眞偽はわからぬのである。

私は少くとも周易以前には他の易はないと考へるのである。従つて八を含む一群の術語は周易に非ず、先代の易であるといふのは、非なることになる。

右の論の如く、周易以前に他の易が存在しないといふことになれば、孔穎達が、先代の易であると先儒がしたのはこの爲であらうとしてあげた(四)と(五)は論ぜずして根據とならぬものであることがわかる。然し暫くこれについて言つて見よう。

(1)の(四)に於て、孔穎達が「貞屯悔豫皆八」の下に司空季子が「是在周易」と言つてゐると言つてゐるが私の見た國語には周の字がなくて、「是在易」と出てゐる。私の見た本の脱字か、それとも孔穎達の見誤りか、それとも孔穎達時代の國語には周の字があつたものか、何れともわからない。次の穆姜の「是於周易」といふのはどうかといふと、これも理由にはならぬと思ふ。何となれば、左傳に他に「周易有之」とか「其在周易」とか「以周易筮之」とかが

随分見出される。だから、ここに「是於周易」といつたからとて、「艮之八」が他の易であるからそれと區別する爲に特に「是於周易」といつたといふことには少しもならぬのである。

(1)の(イ)は先代の易となすのに大きな理由を與へてゐるやうである。然し、「艮之八」を「艮之隨」と言ひ換へたとて直ちに二易が性質を異にした易であるといふ論にはならない。而も(2)の(イ)に於て劉禹錫が「艮之隨」の下の占詞は史が穆姜を喜ばせる爲に言つたのであるといふのに従ひ度いのである。蓋し穆姜が幽閉せられてゐるから隨の卦をもつてきて「隨其出也、君必速出」と悦ばせたのではなからうか。即ち、艮之隨と特に言つたのは艮之八が艮之隨と範疇を異にする易だからといふのではなくして、その筮する時の事情が動機となつたと見るべきで、それは穆姜の言によつても察せられる所である。

以上によつて先代二易となす説には何等の根據がないことがわかる。然らば周易説を持する先儒の根據とする所を見て見よう。

(2)の(イ)の劉禹錫の論は今述べた如く、(1)の(イ)を論破することには役立つ。故に艮之八が周易であるといふことに對して間接的には根據を與へるものであるが、さりとて積極的な根據を與へるものではない。

(2)の(ロ)の論は私は取らない。之は周易説の根據となるべきものでなくして、確かに誤りを犯してゐると考へる。何となれば「遇」蠱「遇」復と同じ形のものであつて、やはり周易の繇詞で占つてあるものが、左傳昭七年に見えるからである。そこには「遇」屯「とあつて屯の卦辭を以て占してゐるのである。錢大昕の説の如くんば、「遇」屯「は「遇」屯之八」と出てゐなければならぬ筈である。この論は從つて周易説の根據とはなり得ない。かくの如く、(イ)(ロ)共に周易説に對する積極的根據は見出されないが、私は周易説に賛成するものである。それは次の理由に依る。

(イ)既に述べた如く、周禮大卜の掌る連山・歸藏二易は周易の以前のものではなく、若しその二易が存在してゐたとしてもそれは周易と同じ性質のものとししか考へられない。

(四) 三つの術語の形式を考へると、「艮之八」史の占↓穆姜の占詞・「得貞屯悔豫皆八」筮史の占↓司空季子の占、「得泰之八」董因の占」となつてゐる。而して、穆姜、司空季子、董因の占は全て周易の繇詞によつて居り、それが決定力をもつてゐる。ここで疑問なのは史とか筮史とか筮を司る専門家の占が決定力をもつてゐないといふことである。そして素人である筮の人が決定力をもつてゐる。而も素人の人は明瞭に周易の繇詞を引いてゐるから、或はこれによつて素人の言の決定力のあるのは周易の文を引いたからであるといへるかも知れない。而も形式の最も簡単な「泰之八」には周易の繇詞だけで史の占詞は見えない。

(五) 三者共に周易の繇詞を引いてゐることそれ自身が周易であるといふことを立證してゐる。之を要するに八を含む此の一群の術語を先代の易ではないかといふ漢儒の疑は、周禮大卜の連山・歸藏にまどはされたものといふべく、これを先代の易であつて周易でないといふと徹達する要は毫もないのである。

二、貞悔

此の三句についてその正體をつきとめるに困難ならしめるものは、三句共形式を異にしてゐることである。「艮之八」の下に「艮之隨」といふものが付き、「泰之八」にはそれがない。一方もう一つは「貞屯悔豫皆八」には貞悔といふ餘分のものゝ冠せられて居り、「之」の代りに「皆」といふ字が出て居る。此等三句に通じる「八」は同一の意味内容をもつものであるといふことは先儒も疑つては居らず、誰しも異論のないことであらう。又、艮之隨は隨の卦を特に出したのは穆姜を悦す爲に史が持ち出したものであるといふことは前に觸れた。さすれば「艮之八」と「泰之八」の連絡はつくのであるが、唯一つ、ここに問題になるのは「貞屯悔豫皆八」の貞悔についての見方である。ここに於てこの貞・悔のもつ意味について考へようとするものであるが、これについては從來二様に考へて來たやうである。一つは本卦・之卦の關係を表はすものとし、一つは兩卦を表はすと考へるものである。

(1) 本卦・之卦説

貞・悔を本卦之卦の關係を表はすといふ考は根強いものである。熊朋來は

三爻變者以本卦爲貞、支卦爲悔。如國語重耳筮得晉國。遇貞屯悔豫皆八。(經說)

と言つて居り、更に沙隨程は

二爻三爻四爻變以本卦爲貞、之卦爲悔、國語重耳筮尙得晉國。遇貞屯悔豫皆八、蓋初與四五、凡三爻變也。(周易古占)と言つてゐるが、朱子の易學啓蒙は之に従つてゐる。而して清代の學者・錢大昕・惠棟・顧炎武等は何れもこの關係に見てゐる。

(2) 兩卦說

これは屯卦と豫卦と兩方を筮して得たとするものである。

(4) 内卦を貞・外卦を悔とする立場からいふのである。韋昭國語に注して

内曰貞、外曰悔。震下坎上屯、坤下震上豫、得此兩卦、震在屯爲貞、在豫爲悔としてゐる。

(4) 初筮して得た卦を内卦に、再筮して得た卦を外卦に擬したとするのが海保漁村の説く所である。曰く、既已再筮、故以初筮所得爲貞、以再筮所得爲悔。擬之内外卦也。故曰貞屯悔豫皆八也。(周易古占法)と。

(4) 本文の語勢から考へて兩卦を得たのではないかといふ疑問を提出してゐるのは朱子である。曰く、據本文語勢以下是連得兩卦而皆不值老陽老陰之爻。故結之曰皆八也。而占之曰閉而不通、爻無爲也。蓋曰卦體不動爻、無所レ用占爾。然兩卦之中亦有陽爻。又不爲偏言皆八、則此說似亦未安。且東宮之占說、亦未定。(答程可久)

と。而して「皆八」と「艮之隨」との二つに於て釋然たらざるものがあるとしてゐる。

(二)周易に見える原筮といふ語を再筮のことであるとして、この場合に於てはめた考である。

金榜曰く、

古者占大事、不嫌再三。金縢連卜三龜、易有初筮原筮也。猶原蠶之原。得國之大事、公子用原筮。故既遇屯、又遇豫也。昭七年衛人筮立君、亦用原筮。其占亦皆主震。初筮元遇屯、其彖曰利建侯、再筮孟縶遇屯之。比。曰盤桓利居貞、利建侯、縶足不良弱行、史朝以利貞當之曰、弱足者居而以利建侯屬元、遂立縶公。由是觀之、貞屯悔豫其爲筮得兩卦而非遇屯之也豫益明。(周易古占)と。

即ち再筮のあり得べきことを主張してゐる。それは國を得るの大事である場合であるとしてゐる。漁村は、

是初筮得屯之亂動、史以爲不吉。故再筮之。

といつて、初筮が不吉と出たから再筮したと見てゐる。

(3) 批判

(1) の本卦・之卦と見る人々は別にその根據となるものを擧げてゐない。「貞屯悔豫皆八」を本卦・之卦の關係に先入主的に早合點してゐる。これは全く「艮之隨」にまどはされたものである。私は此の説を誤りと考へる。その理由は(a) 艮之隨といつたのは姜を悦ばす爲に史が特にもちだしたのであるから、これは標準にならぬ爲であり、(b) 本卦・之卦と考へると「皆八」の皆といふ字の説明に窮する爲であり、且「泰之八」も通じなくなるに依るのである。

(b) については己に趙汝楨が筮宗に於て論じてゐる。彼が沙隨程が、

初與四五凡三爻變、初與五用九變、四用六變、其數不純、其不變者三上、在屯爲八、在豫亦八、故舉其純者

言皆八。

といつて、純なる者が屯と豫とにあるから皆といつたのだといつたのに對して、それならばなぜ「艮之八」を「正艮悔隨皆八」といはなかつたのかと疑問を起してゐる。すぐ其の後に次の如くいづてゐる。

蓋凡稱_レ八者皆主_二不變爻_一爲_レ言。此有_二兩說_一、其一則七八皆不_レ變、今有_レ八无_レ七、謂_二不_レ變者皆八而非_レ七也、其二則艮之八一爻不_レ變、在下卦之_二、泰之八一爻不_レ變在上下之_二五_一、故但稱之八、此占_二三上_一不_レ變、涉_二上下卦_一、下卦不變者皆八、而非_レ七、以別_二於上卦得_レ八而下卦否_一、或下卦得_レ八而上卦否者_一。(筮宗)と。

不變爻が八のみであるから皆八といったのであるといふのは泰之八をやはり一陰爻不變と考へる。さればどの爻を不變と考へるか、二にあげてゐる如く五爻を不變と考へるか、その根據は文には見えないのである。故に折角筮宗にあげた二説も「泰之八」に於てしつくりしない所がある。

而も私が前に言うた如く、此の三句の中、最も純粹の形は泰之八なる故に、之を基本にして考へなければならぬと思ふのである。

次に(2)の兩卦説に於て、(1)先づ最初に韋昭が震について内卦・外卦に見てゐるのは一見誠にこちつけの如くであるが可成面白い見方であると思ふ。震象は侯を表す故に、この場合の筮する目的に合致する八卦である。故に震を持ち出して震を中心にして考へて貞悔といったと見ても見られないことはない。即ち「震を内卦にもつ屯卦と震を外卦にもつ豫卦とが皆八」と見るわけである。それは易學上に於ては貞・悔は内卦・外卦を表はすといふ典據があるからである。僖十五年傳文に蠱卦の説明に、「蠱之貞風也。其悔山也。」とあつて、貞は内卦、悔は外卦であることがわかる。一體、左傳の占筮の例は實際筮してその得た卦を占つたものかどうかは頗る疑問である。莊廿二年陳敬仲を占つて敬仲五世の孫陳桓子が齊に於て強大となつたことを豫言してゐるが如き、如何にも事實に適合せしめる爲に卦を以て説明したと見るべきであるやうである。而して國・侯に關する場合、震を含む卦をもつて來てゐる。昭七年には侯を決める場合に元_二に對しては屯_一、_{坎上}、繫に對しては屯之_レ比とあり、閏一年畢萬の筮にはやはり屯之_レ比をもつてきて居り、晉語泰之_レ八の泰は三より五に至る互體はやはり震である。こんなことから案外この場合も震象があるから屯卦と豫卦とをもつてきたとも考へられ、震象を主として考へて、貞悔といったとも思はれないことはないから、韋昭が震をもつてきたのは理由

のあることも知れぬ。

(四)然し、後人よりして見ればどうも、論理的に見えない。それで韋昭の説を論理的にしたのが海保漁村の内卦外卦に擬したといふ説明である。

貞・悔の性質についての朱子の考は朱文公易説に次の如く見えて居る。

貞是正底便是體、悔是過底動則有悔。

と見え、又、

貞是事之始、悔是事之終、貞是事之主、悔是事之客、貞是在我底、悔是應人底。

とも見えてゐる。即ち貞と悔とは正と過、始と終、主と客、我と人との關係を表はすといふのである。「蠱之貞風也、其悔山也」といふのも、卦に於ては内卦を主、外卦を客と考へることよりの言であらう。されば貞・悔の性質よりすれば本卦、之卦と見るのも初筮の卦・再筮の卦と見るのも何れも優劣を決し難いものと思はれる。が、既に明文のある内卦、外卦に見る方が面白く、且つ、左傳に見える占筮の側から見て、韋昭の説に捨て難い趣がある。と共に論理的には漁村の説に首肯されるものがある。

而して(四)の朱子の文勢上からの疑問は實に肯綮に中つてゐるものといふべく、これによつて皆の字が落着く。本卦・之卦に考へると皆の字がしつくりしない、屯と豫と對立したものと考へて始めて皆の字が生きて来る。

然らば一事占するに再筮するか否かの問題がある。之に對する答が(二)に於ける金榜の説である。原筮を意味するといふことは焦循の易通釋に於ても見える。又、金榜が再筮の例としてあげてゐる昭七年の傳文は事情が多少異なるが如くである。而して漁村が初筮して得た屯卦が不吉であるから再筮したといふのは當らない。何故ならば閏一年の傳文に、屯之レ比を公侯の卦といつてゐる。屯は震下坎上で彖辭にも利建侯とあつて決して不吉ではない。何故に再筮したかを強ひて求めるならば、それはやはり金榜の言の如く、國を得るの大事だから丁寧にしたのであると見るより仕方がない。

要するに私は兩卦を得たと見る方が至當であらうと思ふ。而してその根據を(2)の(イ)・(ハ)に置くものであつて、本卦・之卦と考へた誤りは屯之隨といつた事情を考へずにそれに隨從したからである。最後に「艮之八」と「泰之八」には「之」の字があつて、「貞屯悔豫皆八」には「之」がないのはどういふわけであらうか。「之」は一體「適く」の意に解すべきか、それとも助辭とすべきだらうか。貞・悔を兩卦に取ると、「之」のないのが疑問となる。左傳昭廿九年傳文の「乾之始」の之を助辭と見るのが劉炫の説であるが、此も他の左傳の例より考へて「適く」と訓む方がいゝと思ふ。艮之八「泰之八」も外の例と同一形式と見て之を適くと見たい。されば「貞屯悔豫皆八」は「屯之八」「豫之八」の「之」が略されたので、この場合、八の一字で「八にゆく」といふやうに八を動詞に見たいのである。以上によつて一般的に「艮之八」「屯之八」「豫之八」「泰之八」と形式を統一することが出來た。然らば「之八」によつて示される易學上の内容は何なるものであらうか。暫く先儒の説の進展の過程を辿りたいと思ふ。

○問題其の二

八を爻に關係せしめて解釋した立場と卦に結びつけて解釋した立場とが見られる。而して前者は老陰・老陽・少陰・少陽の四象と結びついて考へられてゐる。

一、爻の立場

これには次の三つの段階があるやうである。

(1) 八を少陰不變の爻を表はすものとする考に本づいての解釋である。杜注に、

二易皆以七八爲占。故言艮之八。

とあるが、之に孔穎達は、

此策乃言艮之八、二易皆以七八爲占。故此策遇八、謂艮之第二爻不變者是八也。揲著求爻繫辭有法、其揲所得有七八九六、說者謂七爲少陽、八爲少陰、其爻不變也。九爲老陽、六爲老陰、其爻皆變也。九爲老陽、六

爲_二老陰_一。其爻皆變也。周易以_レ變爲_レ占、占_二九六之爻_一、傳之諸筮皆是占_二變爻_一也。其連山歸藏以_二不變爲_レ占。占七八之爻_一、二易並亡、不_レ知_二實然以否_一。

と疏して、杜注の七八を以て占すといふのは七八の爻を占するのであるといつてゐる。ここに杜豫の連山・歸藏云々といふは誤りなることは既に指摘した所である。

而して艮之八の場合は、艮の六二の爻が獨り變じないで、他の五爻が皆變じたと見る。

劉禹錫は、

穆姜筮遇_二艮之八_一、史曰、是謂_二艮之隨_一、夫艮之隨唯_二二不動_一、斯遇_レ八也。（左傳杜解補正所載）

といひ、沙隨程は五爻變の例として艮之八をもつてき、二爻、三爻、四爻變の例として貞屯悔豫皆八をもつてきて、八を不變爻と見てゐる此説を持すものは、何れも本爻之爻と見るのであるがそれは既に誤なることは言つた。泰之八について強ひて説明しようとするものは、艮之八を艮之隨とした例に步調を合はせようとする。谷川順祐曰く、

蓋泰之八、徵_二諸艮之八_一、其五爻皆變、唯一爻得_レ八不變也亦可_レ察焉。按泰之八者有_二觀晋萃之三_一也、今推_二諸其占事_一則知_レ得_二泰之晋_一也。（左國易一家言）

と。この三つの存在の可能性が想像され而もその一つに無理に決めなければならぬ所に此の説の不安定がある。筮宗にも既に引用した如く、「泰之八一爻不變、在_二上爻之五_一、故但稱_二之八_一」と一説としてあげてゐる。艮之隨の如きものがないから泰_二六五_一の爻に限定した理由がわからない。又、この説を主張する人は沙隨程の如く、貞屯悔豫皆八を本爻之爻と考へ三爻不變としてゐて、一爻不變とは合致しない。

八をやはり少陰不變の爻とは見るが右の説く所と少し異なるは章昭の説である。貞屯悔豫皆八に於ては

八謂_二震兩陰爻在_レ貞、在_レ悔皆不_レ動、故曰_二皆八_一、

といひ、泰之八に於ては、

遇泰、無動爻、筮爲侯泰三至五震爲侯、陰爻不動、其數皆八、故得泰之八與貞屯悔豫皆八其義同。

といつて、震象についていつてゐる。私は前の貞・悔の説明に於て韋昭が震象をもつてしたことに賛成した。然しこの場合は賛成出来ない。艮之八を説明出来ないからである。艮は三より五に至る互體はやはり震象ではあるが、ここには候たらんことを筮したわけではない。貞・悔に於ける震象の説明は首肯出来るが、八に關する限り、艮之八と牴觸するを免れない。

(2) 右に於いて韋昭が動爻なしと見てゐるが朱子も二、(2)の(イ)に於て引用した如く、老陰老陽の爻に値はないことをいふのではないかと、程可久に答へてゐる。而してそれなら陽爻もあるのに何故に専ら八といつてゐるかと疑ひ、又東宮の説にもあはないといつてその説に安んじてゐない。然し、前者は態朋來が次の如く言つてゐるのによつても或は説明出来るかも知れない。曰く、

或問、左氏國語所載左傳於穆姜之筮既曰艮之八、國語筮重耳之筮亦曰泰之八、又曰貞屯悔豫皆八、七八皆不變爻、何以罕言七而專言八、曰七七著數也、八八卦數也。三揲之餘得少陰爻最易、惟其揲者多得八。故經傳亦多舉八以紀占也。(經說)

と。「八八は卦の數也」といふのは實に此の之八の八を解する關鍵であるが、ここには暫く専ら八といつて七と言はない説明として用ひられてゐるのである。これでは既に八を卦について考へてゐるのであつて爻については考へてゐないのである。此の老陰老陽の爻に値はないといふ説は一應尤もなやうであるが、それなら何故にわざ／＼「之八」の字を附けたかゞ疑問となる。左傳僖十五年には「遇蠱」とあり、成十六年には「遇復」とあり、更に昭七年には「遇屯」と出てゐる。これらの場合と區別がつかないことになる。前二者は周易の繇詞を用ひてないから暫く措くとしても「遇屯」は明かに周易の象辭を用ひてゐて、その限りに於ては「泰之八」と全く同様である。「之八」の二字が多いのはそこに何か原因がなければならぬ筈である。

爻について考へてゐる説は夏殷七八を以て占すといふのにとらはれてゐるといへよう、それを破つたのは顧炎武である。

(3) 顧炎武は七八九六を皆同等に觀て、曰く、

易有七八九六、而爻但繫九六者舉偶之義也。故發其例於乾坤二卦、曰用九用六。用其變也。亦用其不變者。春秋傳穆姜遇艮之八、晉語董因得泰之八是也。今即以艮言之、二爻獨變則名之六。餘爻皆變而二爻獨不變則名之八、是知乾坤亦有用七用八時也。乾爻皆變而初獨不變曰初七潛龍勿用可也。坤皆變而初獨不變曰初八履霜堅氷至可也。占變者其常也。占不變者其反也。故聖人繫之九六。歐陽永叔曰、易道占其變、故以其所占者名爻、不謂六爻皆、九六也、得之矣。(日知錄)

これによれば泰之八をやはり、泰之晉と見る谷川順祐の轍を履むことになり、貞屯悔豫皆八をいかに觀るか、明かない。貞悔を兩卦と見れば問題でないが、本卦・之卦と見れば三爻變となつて矛盾して來る。而して顧炎武の説の如くんば、陽爻獨り變ずれば、之九といふことになる。然し左傳一爻變の多くの例の中で之六とか之九とかは全く見出されないのである。杜注の七八を以て占するといふ説を非とした所はよいが、未だ通じない所がある。

二、卦の場合

八を明瞭に卦に關係せしめたもので、ここにも次の三説が見られる。

(1) 惠棟は二爻以上變を八といふのであるとする。曰く、

易稱、天下之動員夫一、故卦爻之動一則正、兩則惑。京氏筮法一爻變者爲九六、二爻以上變者爲八。晉公子得貞屯悔豫皆八、乃三爻變不稱屯之豫而稱八。穆姜遇艮之八、乃五爻變不稱艮之隨而稱八。所謂貞夫一也。七者著之數也。八者卦之數。著圓而神、卦方以知來、知以藏往、知來爲卦之未成者、藏往爲卦之已成者、故不曰七而曰八。春秋内外傳無筮得某卦之七者、以七爲著之數、未成卦也。(漢學師承記卷二)

といつて二爻以上變する者を八と稱すと明かな定義を下してゐる。而もここに特に注意すべきは八を卦數とした所である。八を卦數としたのは前に擧げた熊朋來の言にも出てゐる。もつと古くは、李鼎祚の周易集解には崔憬の説があげられてゐる。曰く

崔憬曰、著之數、七七四十九、象陽圓、其爲用也、變通不定、因之以知來物、是著之德圓而神也、卦之數八八六十四、象陰方、其爲用也。爻位有分、因之以藏往知來、是卦之德、方以知也。

と。又一行歷本義には

著以七備、卦以八用、(唐書歷史卷十七)

と見え、玉海卷三十六、唐周易大衍論には、

邵子曰、八者卦之小成、則六十四爲大成、著德圓以況天數、故七七四十九、卦德方以泥地數故八八六十四。

とあつて、これらに於ては八は少陰不變爻と見ないで卦の數と見てゐる。されば惠棟は八を爻の立場から見ずに卦の立場から見てゐる。

而して二爻變以上といふけれどもそれは不變であるといふ論法を取つてゐる。曰く、

京房占法、一爻動則變、亂動則不變、若然一爻變爲九六、二爻以上變爲七八也。

愚謂左傳所占卦如云其卦遇蠱、其卦遇復、穆天子傳其卦遇訟、皆六爻不動也。

其云遇艮之八及晉語遇泰之八、皆二爻以上變、仍爲七八而不變也(易例の占卦の部)と。

二爻以上變は不變であるといふ一種の詭辯の如き論が正當な論理を有してゐる。ここに於て朱子が老陰老陽の爻に値はずとした説に對して私が遇蠱等の例を引いて論駁した點が氷釋される。而して惠棟の亂動不變の説と朱子の老陰老陽の爻に値はずといふ説とはその彈力性に於て甚しい差異が認められる。惠棟に於て、今まで八を爻について考へた爲に覆うてゐた雲霧が一時に霽れた感がある。八は卦といふ新しい力強い立場に立つてゐるのである。

(2) 惠棟の二爻以上變は不變であるといふ思想は必然的に卦辭に連絡する。卦に結びついてゐるものは卦辭である。卦辭を以て占するを八と稱するのではないかといふ疑問は趙汝楳の筮宗である。曰く、

穆姜筮得艮之八、董因筮得泰之八、皆舉卦辭爲占。豈筮得八而以卦辭占者乃當時占法邪。

として卦辭を以て占する事實を適確に見てゐる。更にそれを斷定したのは錢大昕である。曰く、

占筮之法曰、春秋之世、三易尙存、其以周易占者一爻變則以變爻辭占。如觀之否、歸妹之賤、明夷之謙之類是也。

數爻變則以彖辭占。如艮之八、屯貞、悔豫皆八是也。六爻皆不變亦以彖辭占、泰之八是也。以爻辭占稱九六、以彖占稱八九六八之名、惟周易有之。(潛研堂文集卷四三)

と。明快な論で、事實の核心をついてゐる。唯、問題其の一に於て論じた如く、惠棟も錢大昕も、三句の形式統一に深く思を致さなかつた爲に、惠棟は貞屯悔豫皆八を三爻變として艮立八を五爻變として泰之八には言及しないといふことになり、錢大昕は數爻變として艮之八と貞屯悔豫皆八をもつてき、六爻皆不變として泰之八をあげるやうなことになる、そこにもう一段の精鍊さを要するが如き感を與へるのである。即ち、惠錢二氏は未だ貞・悔を本卦・之卦に見る蒙を啓いてゐないのである。

(3) これに答へて現はれたのが海保漁村の周易古占法である。先づ、

八者識卦之名又二爻以上變占卦之名。

と八を定義してゐる。而して二爻以上變は彖辭を以て占するとなして曰く。

周易唯占二爻變、若二爻以上變者不可執一定一義、則寧舍爻而占彖、仍爲七八而不變、是先儒古義、而唐以後古學失墜、斯義不明、諸儒附會之說、又從而亂之、則周易占法之所以沈沒至今日也。幸有杜元凱左傳注、一錢未絕、足以發千古幽秘、曰、易筮者皆以二變者占、遇二爻變、義異則論彖、孔仲達曰易、筮皆以二變者爲占、傳之諸筮皆是也。若一爻獨變則得指論此爻、遇二爻變以上、或二爻三爻皆變、則每爻義異、不知所從、則當總論。

爻辭、襄九年案二君此言得之漢經師相傳、則知周易占法一爻獨變者以爻辭占、二爻以上變者總占彖辭、不占爻辭、是古義也。

と。ここにあげてゐる杜注の「遇二爻變、義異則論彖」を竹添氏は會箋に「注一爻變下、疑脫以上二字」と言つてゐるがこれに従へば更に意味が明瞭になるのである。而して八の説明には、

爻有七八九六、以成八卦、而經以九六識爻者、爻占變也。以七八畫卦者、卦占不變也。雖以七八畫卦而七著數也、八卦數也。於是又偏以八爲識卦之名。

としてゐる。兼坂晋氏の指摘せる如く、漁村の説は全く惠棟錢大昕の説をうけついでものである。而して之八の解釋も漁村に至つて先一段落をつけたと見るべきであらう。

之を要するに、八を卦の代名詞と見るのも、少陰不變爻と見るのも何れも二爻以上變を指すのであつて違ひはないのであるが、爻について考へると、以上論じた如く、まだ通じない所がある。又、本卦之卦に於て、「某卦之某卦」とあつて、「之」の下は何れも卦が來るのであつて、爻は來ないのである。而して艮之隨をもち出したこと、及び史と穆姜の占詞は事情が然らしめたものであるといふこと、及び貞悔は兩卦をいふことを漁村は明かにしてゐる。而も晉語に於ては屯と豫の彖辭にまづ本づいて占つてゐる、艮之隨に於ては艮の彖辭が見えない點などは何れも漁村の説の正鵠を得てゐることの裏書となるものであらう。以上、諸説の過程を示せば、爻についての考から卦についての考に進展し、一方、夏股七八を以て占すといふ考から抜け出で、更に貞悔を本卦・之卦と考へる誤から抜けて、終に漁村の説に達したものと見られるのである。